

第4期札幌文化芸術円卓会議 第2回会議

会 議 要 旨

日 時：平成28年2月5日（金）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 2号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） 猪熊委員から遅参するとの連絡がありましたので、始めさせていただきますと思います。

今日は、前回に引き続きまして、皆様、大変お忙しい中をお集まりいただき、まことにありがとうございます。

お時間となりましたので、ただいまより、第4期札幌文化芸術円卓会議の第2回目を開催いたしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

2. 議 事

○事務局（加茂市民文化課長） 私から前回の会議の最後に、各委員から発表いただいたご意見のうち、興味・関心のあるもの、もう少し深く聞いてみたいというものを一つ選んでくださいというお願いをさせていただきました。

そこで、今日は、まず、各委員から他の方のご意見で興味のあるものを発表していただきまして、それについて話を深めていきたいと思っております。最後に、時間が許せば、我々からも幾つか聞いてみたいものがございますので、前半はそのような形で進めさせていただきますと思います。

それでは、今回は時計回りで行きましたので、今回は反時計回りでお伺いしたいと思います。

それでは、吉田委員から何かご興味のある項目についてお話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

○吉田委員 猪熊委員の意見についてなのですが。

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、後にしましょう。

次に、森嶋委員、お願いします。

○森嶋委員 皆さんの意見が非常におもしろくて一つに絞れなかったのですが、特に個人的に興味があったのは、吉田委員のPDFファイルのお話で、紙媒体をイメージスキャンでファイルにしてウェブサイトへアップロードするというものです。恐らく、これが川上委員のおっしゃっていたアーカイブ化につながってくると思うのですがけれども、こういう試みは非常におもしろいと思いました。

そこで思い出したのが、兵庫県立芸術文化センターという兵庫県の劇場のジェネラルマネジャーの林さんにいただいたものです。これは、年間の公演スケジュールが組み立てられていて、内容もそれぞれきちんと固まっているからこそできると思うのですがけれども、兵庫県立芸術文化センターで行われるイベントのチラシがこの本1冊にまとまっています。

芸文センターは、チケットを売り切る劇場という異名がついていまして、主催事業が非常に多い劇場です。オペラだけではなく、クラシックやいろいろやっていますが、広報戦略が非常に巧妙で、こういうものがあると私どもも非常にいいなと思います。例えば、関連性の高い演劇やダンスは、普段、折り込みに行くのですが、全部の公演に折り込むのは

ものすごい労力になってきます。私どもも、印刷代だけで広告費を5,000円から10万円ぐらいまでかけることがあります。ですから、これに2万円がかかりますと言われても、誰かが仲介して配ってもらえたり、PDFをウェブサイトにアップロードしていただいたり、アーカイブ化みたいな形でつながっていくとすごく楽でいいなと思います。

また、川上委員がおっしゃっていましたが、いろいろな情報サイトに登録するのは非常に大変ということもありまして、年に1回ということであればそんなに苦ではないのですが、私どもは年間に50企画ぐらいやっています。そうすると、月に4回で、終わったらまたすぐに次が始まるという状況なので、一つ一つ登録していくととても大変です。ですから、年度初めにPDFをここに登録しておけばいいという軸があると非常にすばらしいと思いました。

それ以外にいろいろな情報発信するウェブサイトや雑誌などがあってもいいのですが、PDFは軸になると思いました。まずはここに載せておこうという最初に載せておく媒体があるというのはおもしろいアイデアだなと思いました。

質問というより勝手に話してしまいました。

○事務局（加茂市民文化課長） 吉田委員から、今のお話に補足するようなことがあればお願いいたします。

○吉田委員 実は、チラシを簡単に製本したものは東京でも見たことがあります。ただ、東京の場合は、とにかく公演数が多過ぎて、例えばクラシック音楽のオペラ関係とか歌曲関係だけで製本しても、すさまじい厚さになります。ただ、札幌の場合だと、この1年、いろいろなチラシをあちこちで集めてみましたが、かなりあるけれども、行き渡らないものが多いと思いました。有名なものはあちこちにあって多過ぎるぐらいですが、ちょっとマイナーになると本当に置く場所が限られていて、これはもっとあった方がいいなと思います。例えば、かでの2・7で見かけたものでも、欲しいなと思ったら、もうなくなってしまいましたと受付の方に言われます。何でもっと刷らないのだろうかと思うものになりに出会っています。だから、マイナーなものをもっと掘り上げてみると、意外と知られていないけれども、札幌の文化は思ったよりはるかにリッチだなというのが、私がこの1年を過ごしてみて感じたことです。

今、兵庫の話がありましたが、やっているところはもっとやっています。私も、今日の後半のお話で福岡の例を挙げましたが、もっと工夫しているところがあるので、札幌はもっとその辺はやりようがあると思いました。ただ、ベースはできているので、それをどうつなげてうまくやるか、まさに今年のテーマである伝える工夫をどうやっていくか、それをうまくやってやれば、今のPDFも含めて結構効果が出てくると思います。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

我々も今、札幌文化芸術劇場を平成30年の開設に向けて整備しているところです。劇場をつくる担当部署がありまして、今日も後ろに傍聴に来ていますが、全国のいろいろなホールを拝見しているところであり、当然、兵庫も見てきております。ただ、今、

見ている観点はホールのつくりが中心ですけれども、実際の運用のノウハウも我々は吸収していかなければならないと思っております。

今、演劇シーズンというものをやっていますけれども、演劇を見に行くともものすごい量のチラシを受付で渡されますが、恐らくそれが製本されているというイメージだと思います。兵庫は、どういうタイミングでチラシをもらって、製本して、配っていくのか、非常に興味のあるシステムで、うまくやっぺらっしゃるのだなと思えました。

PDF化の部分は、前回、アーカイブの話が出たと思いますが、チラシというのは、このチラシの権利が誰にあるのかということが結構問題になることがあるのではないかと思います。業者につくっていただいて、権利まで主催者にもらえるのか、業者にあるのか、我々もアーカイブ化するときに著作権という問題をしっかり押さえておかなければならないのではないかと考えています。

川上委員は弁護士・弁理士でいらっぺらっしゃいますが、その辺りがもしわかればお伺いしたいと思っております。いかがですか。

○川上委員 恐らく、作っている人はそこまで厳密にやっていないというのが現実だと思います。しかし、主催者には間違いなく権利があると思うので、その人の許諾は絶対必要になってくると思います。日本の著作権法の場合は、今は被侵害者から何かしら言われないう限りは特段違法ではないし、別に何ということはないという形なので、載せるときには、アーカイブ化するとしたら許諾を取る方法を考える、ないしは、文化ステーションに載せるときに、こういうことに使うことがありますよということに了承した上でクリックしてもらおうよう許諾ボタンを一つ挟むという対応が現実的だと思います。

○事務局（加茂市民文化課長） 我々も、劇場の他にアートセンターをつくっていますが、文化芸術情報のアーカイブ化は課題として認識しています。ですから、その辺りの研究も、これから進めていかなければいけないと考えているところでございます。

続きまして、角田委員、よろしくお願ひします。

○角田委員 よろしくお願ひします。

私は、川上委員の意見③の批評家集団を育てるプロジェクトの立ち上げに興味があります。批評家集団というネーミングがいいかどうかは置いておいて、これはものすごくわかりやすく言うと、専門家向けの食ベログみたいなものですか。

○川上委員 食ベログレベルでもいいと思っぺらしまして、見て何か意見を発信すること自体が芸術文化では余りされなくなっぺらきています。そういう意味で発信する人たちを育ててほしいということなんです。

○角田委員 それから、森嶋委員のコンシェルジュのような人を設けるということが理由②のところにあるのですが、今の話とつながるのですけれども、導く人を立てるというのは、今はなかなかないのではないかと考えています。

これは、いいなという意見です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

よく文化芸術の批評が新聞や雑誌に載っていますけれども、それ以外で批評家の方々が活躍する場というのはどんなイメージでしょうか。

○川上委員 批評がたくさん集まれば、それがわかりやすい情報になりまして、判断の基準になるので、そういうことを発信する人たちが増えるのはいいなと思います。発信の媒体は余り関係ないと思いますが、今だとネットが多いと思います。確かに、批評にもランクがあると思いますが、批評に対するキュレーションは、すべきではないというのが個人的な考えです。

○事務局（加茂市民文化課長） そういう芽を育てていって、情報を整理して伝えていくという人材を育てていくということは重要だと思います。アートセンターでは、アートマネジメント人材をはじめとして、いろいろな方向から文化芸術を見ることが出来る人材を育てていくというのが、これから取り組んでいきたいメニューに挙がっております。

○事務局（川上文化部長） 批評家ということで思い出したことがあります。

今、ちょうど演劇シーズンをやっています、ホームページをごらんになった方もいらっしゃると思いますが、「ゲキカン！」というコーナーでは、皆さんの思いや解釈を何人かの方が述べられているのです。全く知らないで見るという楽しさもあると思いますが、どんなものかということがわからない中で、書かれているコメントを見て、どんな演劇かということを手の中に入れておいた方がよりわかりやすいなと個人的には思っています。それも、ある意味、批評家という言い方ではないですが、演劇に導いてくれる専門の人たちかなと思って聞いていました。

○川上委員 まさにそういう話だと思います。今の話を聞いていて思ったのは、発表しやすいような場所をつくると、荒れるかもしれませんが、そういう人たちが増えるのかなという気がします。例えば、そんなに書かれないかもしれませんが、文化芸術情報のコーナーに感想欄をつけると、育てていく一歩になるかもしれないと思いました。

○事務局（加茂市民文化課長） 他の委員からも、今の話について聞きたいということがあれば、随時、ご発言いただきたいと思います。

それでは、猪熊委員が参りましたので、吉田委員から話をお願いします。

○吉田委員 本当に単純な質問で、いろいろなアプリを使ったことがないものですから、最初に出てくるタイムアウトとかピーティックスがどういう機能なのかということと、さらに、猪熊委員がこんなアプリがあればいいなと思っているようなものがあるのか、今はなくても、今後できたらいいなということが何かのきっかけになるかなという質問です。

○猪熊委員 まず、タイムアウトとピーティックスをどんなときに使うかも含めてお話しします。

タイムアウトは、東京で今日やっているイベントを知りたいときに使います。例えば、今、六本木の美術館、森美に行ったときに、美術館の後に何か関連したような個展があるかを調べたいときに、エリア情報から似たような情報を吸い上げることができるのが特徴なのかなと思います。

また、観光客もそうですけれども、訪れた際に限られた時間の中で人が動くと思うので、ユーザーが自分で情報を取りに行くことができるというのが大きな特徴かと思います。

ピーティックスの方は、ディレクターの方がすごく使いやすいと思いますが、演劇や美術鑑賞、トークイベントなどがあつたときに、事前にお金をコンビニなどで払える仕組みになっているのです。また、ネット上でカードを切ることもできるので、先にイベントに行くよと表明できるのです。そして、イベントを実施している人たちは、どれくらいの人たちが来るのかを予測集計ができるので、それがすごくいいところだと思います。

ピーティックスもタイムアウトもそうですが、自分の興味のある関連イベントがコミュニティ化して見えているという状態なので、どんな演劇なのか、例えば純文学っぽいものであれば、その周辺情報も出てくるというのが大きい特徴だと思います。

それを札幌に置きかえたときに、美術や芸術は札幌だけで行われているものではないと思うので、日本全国、世界であらゆる関連を見たときに、例えば、次の国際芸術祭の監督に大友さんが就任しますけれども、大友さん関連のものを福岡で見たときに、札幌へ帰ってきたら、こんなトークイベントがあるなど、今までリンクしていなかったような動線を札幌も世界に対して開いていく、世界の情報とつながっていることがすごく重要なのかなと感じているところです。

○吉田委員 そうすると、今はエリア限定なのかもしれませんが、東京以外でも他の主要都市でやっているものがジョインするという動きは既に出ているのでしょうか。

○猪熊委員 感度の高い方はきっと掘り下げていると思います。大友さんが好きであれば、関連情報は持っていると思います。多分、情報がよりわかりやすく提供されるという言葉が平たく捉えると、掘るまでいかないけれども、レコード屋さんに行ってみたいという感覚にさせる、美術館だけではなくて演劇も見てみたいなという気分させるということがすごく重要なのかなと思います。

情報を取りにしている人はもう取っていると思います。そうではなくて、取りに行く方法がわからない人たちに対して、こんな方法もありますよと示す。ですから、先ほど言いましたアプリはそれを促すツールの一つだと思うのです。

○吉田委員 そうですね。やる人はやるでしょうから、わかりました。ありがとうございます。

○事務局（加茂市民文化課長） この件に関して、他の委員から何かございますか。

（「なし」と発言する者あり）

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、川上委員、お願いします。

○川上委員 森嶋委員の意見⑤に多言語での情報発信とあります。それはとても必要だなと思っているのですが、それを札幌市がお手伝いしてくれるととてもいいなと思っていました。私たちも、それはいつも考えるのです。日本語だけでやると楽なのですが、それを英語に訳して、さらに中国語なんてもうお手上げで、できないのです。ですから、そういったところを何かしらのプラットフォームに載せたら、それが札幌市の方で中国語に

なってサイトに載せてくれるとすごく使うなという気がします。多言語化での情報発信をお手伝いするような仕組みがあるといいなと森嶋委員の意見を見て思いました。

森嶋委員、そのあたりはどうでしょうか。

○森嶋委員 親戚が多言語の仕事をしていることもあり、簡単ではないと思うのですが、小さいところからできることがあるように思いました。例えば、演劇のあらすじを全部変換となるととても大変ですが、タイトルを英語で入力する欄を作っておくとか、カジタ委員が携わっているART A I e R Tは英語で入力するところもありますね。誰かが変換するとなるととても大変だと思いますが、ちょっと工夫するだけでできるのではないかというのは、題名とオープン時間、場所も施設を登録しておけばそのぐらひは変換してあげるといふことをすれば、好きな人は冒険心がありますので、飛び込んでいきます。

ちなみに、台湾に行った場合は、ホテルなどに中国語と英語で書かれたA5版ぐらひのサイズの情報誌があります。それは2カ国語でやっていました。だから、中国語、韓国語までいけたらいいですけども、まずは2カ国語でもできれば中国の方も韓国の方も英語を話せる方が少なくないので、いいのかなと思ひました。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

先日も台湾の例がありました、ホテルにアート関係の情報誌が2カ国語で置いてあるのですね。

○森嶋委員 ホテルにもありましたし、地下鉄を待っている間にモニターで情報が流れていました。そのときは、地下鉄を待っている間、オペラとダンスと美術の情報が流れていました。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

先ほど、川上委員から、多言語化するに当たっての障壁というか、ハードルを少し下げるべく行政の支援があつたらいいなというお話でありました。

正直、翻訳業になってしまうところもありますので、直接、日本語を預けられて多言語化するシステムをつくることのできるのか、形を変えて違つた形で多言語化を促進するのか、我々も考えていく必要があると思ひながら聞かせていただきました。

それでは、続きまして、カジタ委員、よろしくお願ひします。

○カジタ委員 カジタです。よろしくお願ひします。

気になつたのは、川上委員の批評家集団です。これは、僕も前々から必要だという話をしていました。かといつて、どうやって作つたらいいかといふのは、この間、芸術祭のS I A Fラボでも批評とは何だろうといつたトークディスカッションのようなものがあつたのですが、現場に行く前に調べたのは、批評と批判と感想の違いです。多分、そういう大前提から考えていかないといけなくて、先ほど演劇シーズンの「ゲキカン！」の話が出ましたけれども、結構感想が多いです。もちろん、それが引き手になって、こういう感想を持つ人がいるのであればといふのももちろんあるのですけれども、そういうラインと同時に、批評といふものも必要だと個人的には思っています。より専門的なことをちゃんと語

れる人も必要だと思いつつも、では、そこをどうやって作ればいいのかというのは…どうすればいいのでしょうか。

○川上委員 どうすればいいのでしょうか。それは、よく悩むのです。

上手に話せるかどうかわかりませんが、発信する人は文脈を語ってはいけないということを東京の結構有名なギャラリストが言っています、それはまさにそうで、手前味噌な話をしてはいけないと思っています。だから、育てるのが本当に難しいのだと思います。やっている側は一生懸命人を集めたいから、批判もしやすいし、批評もしやすいし、感想も言いやすいのだと思います。ただ、そもそも批評したい人なんているのかという話から始まるので、難しいと思います。でも、何も無いのは嫌だと思いつつやっています。

○カジタ委員 今、川上委員が言ったように、発信する側は結構やりづらいところがあります。かといって、批評家だけで生計を立てていけるのかというと、なかなか難しいので、どうすればいいのかなと思います。

それから、今、皆さんのお話をいろいろと聞いていて思ったのは、ART A1eRTというサイトは2カ国語で、一応、中国語も視野に入れていて、もうシステムは組んでいるのです。僕らが自分たちで見つけて情報を載せていいですかと許可を取る場合もあって、それはタイトルの英語だけを教えてください、あとはこちらで系統的に英語にしますということにしています。ただ、考えていらっやらない企画者が多いので、タイトルがローマ字打ちで来るのです。主催者がそういうのであればそうだろうということで、そのまま載せるのですけれども、やはりそこまで意識が及んでいないのだなということは実際の感想としてあります。

森嶋委員がおっしゃったように、会場は全部、立ち上げ前に英語化したのです。会場をつけ足す場合も、基本的に住所は手打ちでルールを決めてやっていますが、残念ながらART A1eRTでやっている人間はボランティアなのです。どこかで力尽きてもいいよなということシステム化して、中の構成員が変わってもサイトが続けられるように考えてやっているのですが、きついです。特に、入場料がきついです。毎回システムが結構変わるので、前売り、当日、学生、シニアならいいのですが、何とか券とかいろいろ出てくると、仕方がないのでグーグルに頼ります。一応、翻訳できる人もメンバーにいますけれども、その人間はヨーロッパに行っているのではなかなか連絡がつかないので、仕方なく直訳ということも多いです。

それから、一番翻訳すべきあらずじみみたいなところではできないのです。そうかといって、芸術祭をやっていたときに翻訳が出てきたのですけれども、それも専門用語の難しさはすごくありました。結局、紆余曲折を経てやっとそこに落ちつくみたいなことになったり、その世界を知っていないと翻訳できないことも多いので、なかなか難しいから、それこそ助けてくださればすごくありがたいと思います。

それから、猪熊委員が言っていたピーティックスは、前回のときにその場でダウンロー

ドしてチェックしました。同時に、カテゴリーに限った話で言うと、演劇ではPDFをアップするアプリがもうあります。僕は劇団のプロデュースもするので、それを使っています。演劇に限ったことで言うと先に進んでいて、事前にお金を払えるシステムも手数料を無料でやり始めている企業があります。それも導入していかなければと思いながら、今、下調べをしているところです。

これは、ジャンルに限ったことですが、やはりジャンルレスで載せてくれるのは一つの魅力で、ART A1eRTというのはそれを目指したのです。札幌は、結構ジャンル別固定の告知サイトは多いですが、ジャンルレスのものが無いのと、キュレーションではないですが、これは見ても大丈夫だよというものを選別しています。ですから、余り優しくないサイトで、ある時期になると載せているイベント数が30件しかない、何かないかという連絡が来るのです。やはり、その辺はうまくバランスをとりながらやらなければいけないという難しさもありますので、行政の方たちだとピックアップして載せることは難しいと思いますけれども、個人に責任を負わせる、批評家が褒めた何とかでも何でもいいので、そういうものができればいいのかなと話を聞いていて思いました。

感想になってしましましてすみません。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

批評の部分ですね。その人たちはどうやって生計を立てていくのかという問題もあります。高いレベルで批評を続けていくには、それなりにそこに注力していかなければならないので、その方たちがどういうふうに生計を立てるのかというのが、平たい言い方ですが、私もイメージし切れないのです。

○カジタ委員 僕らがサイトを立ち上げた理由は、もともとウェブサイトで札幌の情報を扱っていたところが続々と倒れていったのです。札幌江別近郊演劇情報とかいろいろあったのですが、大体個人がやられていて、それでお金になるわけではないので、無理ですとやめていってしまうのです。

美術だと北海道美術ネットという梁井さんという方がやられているサイトがあるのですが、梁井さんは最近仕事が忙しくて全然回れないということをごちゃごちゃしています。そこで、金銭が生まれません。そういう活動をしている人ほど、本当は援助すべき部分だったり、褒めたたえて表彰する、お金をあげるでもいいのですが、そういったものが必要ですが、残念ながらそこでお金が生まれていないのが事実です。

ART A1eRTの場合は、これから寄附を募ろうという話が出ています。専門がいいのかという問題もそうですが、いっぱい見て書かなければいけないので、批評というのはすごく時間がかかることですし、そういうものに対して何らかの補助があったとしても、それでいい批評家が育つのかどうかもわかりません。

○事務局（加茂市民文化課長） 続いて、小野寺委員、お願いします。

○小野寺委員 よろしくお願ひいたします。

多少前後するのですが、先ほど多元語化のことが皆さんからお話が出ていましたが、私

は、インターネットをやっていないものですから、今もここに参加していても完全に違う世界からここに来た者かと思いつつも、私と同世代の仲間で私と同じような方も結構多いのです。

それから、他の先生はプロジェクターを使うのですけれども、私は旧来の黒板を使った授業をしているので、教え子たちは私の授業はほっとする、うまい、下手ではなく、この時代に育っても機械が苦手だという若者もいることを私は教育の現場ですごく感じております。それで、皆さんの趣旨とは違うのですけれども、右と左に手があるように、右手がネット上のことであっても、左手にアナログ的な発信というものに重きを置いてほしいと思います。

私は、今、皆さんのお話を聞いていて孤独感を感じております。ただ、皆さんに対してこういう人間もいることを正直にお話しすることは、たまたまこのメンバーに加わりました私が発言すべきことなのかなと思いましたが、ご了承ください。

続いて、多言語のことですが、私は13年ぐらい前に姉妹都市の交流員になったことがあります。そして、私が行った先がドイツのミュンヘンで、瀋陽に行った交流員とパーティーで話す機会がありました。そのパーティーでは、雪まつりやミュンヘン・クリスマス市のボランティアの方も発言していたことがあります。それは、私は中国語が堪能けれども、それを役立てることができなくてストレスだ、年に何回かの行事で無料のボランティアをやってすごく生きがいを感じるということでした。だから、私が言いたいことは、ボランティアということに関してはいろいろな意見があると思いますけれども、自分の活躍の場を求めている人、特に今は高齢社会で元気なお年寄りがいっぱいいます。そして、私自身も、実はドイツ語を少しずつ勉強して雪まつりのドイツ語ボランティアで参加したいと思っています。私は、英語は全くできませんが、ドイツ語はとても耳に心地よい言語で、自分では音楽のように受けとめました。

姉妹都市は札幌市と関連があると思います。たしか札幌市の方もお見えになったし、その後に関かれたパーティーに当時の桂市長と一緒に出た記憶があります。どうかそういう姉妹都市の関連の方とコミュニケーションをとられて、多言語化についてのボランティアを使っていただけたらいいと思います。私も、将来、ドイツ語でお役に立ちたいという気持ちがありますので、どうかそれを市にお願いしたいと思っています。

続いて、私が興味を持ったのは、森嶋委員の言われたコンシェルジュです。これは、私の友人が本州のホテルのコンシェルジュをやっています。それとは全然違うものだとわかるのですけれども、ホテルのコンシェルジュはお客様と接することは、自分も役に立ち、お客様にも私のように調べられなくて聞いてくる方がいるようです。そのときにも丁寧に答えると、ホテルのイメージも上がって、お年寄りはホテルの感想としてそういうことを書いているということです。ですから、コンシェルジュという、機械ではなくて対生身の人間をこれからの文化芸術活動の中で置いていただければいいと思います。

私も、音楽や美術は大好きですが、全部中途半端です。専門的なことがわかるかといえ

ば、何もわかりません。アートセンターについて詳しく知らなかったのですが、今回、その話を聞くことができ感謝しています。札幌市から文化芸術の計画の冊子をいただいて、位置づけがわかってきたので、とにかくコンシェルジュが必要です。

それと類することで、角田委員のイベント盛り上げ隊も人がかかわってきています。そして、私自身のことと言うと、②のところで、モニターとかサポーターという意見です。ですから、そういう人をつくっていただきたいと思います。

もう一つ、関連として、批評家集団です。これも人だと思えます。

さらに、私は、インターネットをやらないので、フリーペーパーをよく見ます。実は、いろいろなフリーペーパーで、レベルの高い一般の読者の感想を何度か目にしたことがあります。各区のもの、それから東京の友人から東京のフリーペーパーを送ってもらっています。皆さんはプロですから、それは当たり前ですが、プロを意識すると人材はなかなか育ちにくいと思います。セミプロとか、アマチュアでもすごく詳しい人をフリーペーパーなどで探しまして、その方にゲストに来ていただくことができれば、その方に興味を持ったり、その分野に興味がある一般の人が行って、そこで会のような集団ができて、そこで批評家みたいな人をどうやって育てたらいいだろうかということ、この円卓会議をつくったように市が取り組んでくだされば、そして、コンシェルジュ、批評家が札幌市の中でアートセンターと一緒にはっきりとできあがったら、それは世界でも類を見ない行政と市民が一緒になってできるものになるのではないかと皆さんのお話を聞きながら私なりに考えてみました。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

たくさん委員のお話について言及していただきましたが、特にコンシェルジュの話が出ていました。恐らく、コンシェルジュに求められるアートの知識、ノウハウレベルと批評するときに必要なものは近いと思いますが、その辺はどういうふうに思われますか。

○森嶋委員 性質は非常に近いと思います。どちらも高度な知識を必要としますし、捉われない広い視野が必要だと思います。批評家というのは、非常に他人に嫌われやすいもので、第2期円卓会議のアーツセンターの提言を見せていただいたのですが、ここではアートソムリエという名前ですが、これがコンシェルジュに近いのかなと思います。こちらは、逆に、幅広い方をナビゲートする役割だと思うのです。批評家というのは、専門的なものを求められますから、これを札幌でというのはどうなのだろうというのが正直あります。まちの特性が多少あると思うのですが、東京はやはりものすごくイベントが多いと吉田委員が言っていましたけれども、アーティストも多いし、ダンサーもすごく多いのです。次から次に地方から出て行ってチャンスを得ようとし、そこに批評家の存在も大きいというのがあります。批評家は、多分、質を向上させていくのをサポートする役割があると思うのですが、札幌でそれをやるべきかどうかは、現時点では僕は正直わからないのです。

何を指すのかということはあると思いますが、世界で1番になるのか、それとも、幅広い市民を笑顔にするのか。批評家は難しいけれども、いたら励みになりますし、そういう存在がいたらいいなという意見はありますが、批評される側はしんどいところがあります。それだったら、確かに「ゲキカン！」のようなものは今すぐできるし、これは皆さんポジティブなものしかないので、そういうところから始めて、ジャンルが成熟していったときに自然に出てこないかなと思っています。

○事務局（加茂市民文化課長） アーティストが批評家になるというパターンもないわけではないと思いますが、アーティストではない方がアートマネジメントをされたり、今のコンシェルジュとかソムリエをやることも十分想定されますし、むしろそちらの方が多いのではないかと思います。

○カジタ委員 コンシェルジュで思い出したのが、僕がカフェに行ったら、ドイツ人の家族がいて、英語で話しかけられました。僕は英語がわからない上に、向こうも余り得意ではなくて、片言で札幌で現代アートが見られるギャラリーはないかと聞かれました。今日帰るのだけれども、今から何時間で見られるところがないかと地図を片手に聞かれたのです。今行けるところだったらこと、こと、ここではないかというような会話をして、彼らは最後に、自分たちもアーティストでこういうのをやっているのだよと言って去っていったのです。

批評と違ってコンシェルジュは、そういうざっくりばらんな質問に対して答えられるということかと思うのです。彼らは、どこに聞いていいかがわからなくて、この人に聞いてみようという感じで聞いてくれたのだと思うのです。彼らは、本当にたまたま観光に来ていたらしいのですけれども、大きいヒヨコをつくっているアーティストでした。今の話を聞いていて、とりあえずそこに聞けば何か答えてくれるみたいな機能がアートセンターにあって、詳しくない状態でもほどよい感じで情報を与えてくれるのと、批評というのは大きく違うのかなと思いました。

○事務局（加茂市民文化課長） 恐らく、批評とコンシェルジュというのは違うのでしょうけれども、アーティスト以外でアートにかかわるカテゴリーというのは、例えば、この間、ある方が表彰されて新聞に載っていましたが、アーティストではないのですが、子どもたちにアートを伝えるような活動をされています。

大学の中には、アートマネジメントを行う学生を育てて、アート界に輩出している学校もありますが、恐らく、輩出した後の行き先を求めているでしょうし、それが、アートセンターの開設によって受け皿になっていくという形が生まれていく可能性があると思います。批評家なり、コンシェルジュなり、形は違うかもしれませんが、アーティストではないアートに関わる人材を、これからは育てていく時代なのだと思います。

○吉田委員 大したことは言えないと思いますが、批評のところです。

8年ぐらい前までクラシック音楽の季刊誌で「季刊ゴーシュ」というものがあったことをご存じの方がいると思います。残念ながらもなくなってしまったのですが、私は東京にい

ながらずっと定期購読していたのです。

あの中には、いろいろな音楽を取り巻く北海道での状況がインタビューなどで載っていましたし、演奏会の批評なんかも載っていたわけですが、やはり財政的に難しくなって休刊になってしまったのです。

これはクラシックの分野ですけれども、演劇とか他の分野で季刊誌なり月刊誌が何かあって、それが何らかの形でペイしていれば、原稿料を払ってちゃんと批評する人材もだんだん育ってくるような気がします。クラシックの場合だと、例えば一般的なもので言うと、「レコード芸術」という雑誌があります。ここはレベルが高いため、投稿しただけでは簡単には載らないですし、原稿料もささやかなものが出ます。ある程度しっかりしたものがあるので、潜在的にはレベルの方は結構いらっしゃるのですけれども、投稿しようという場がなかなかないのです。そういうものはやりようがあるのではないかと思います。

ですから、コンシェルジュはもちろん必要で、とてもすばらしいことだと思います。それこそ、何とかコンシェルジュのバッジをつけてまちを歩いていけば、あの人に聞けばいいのかなというのがあるといいと思います。ただ、批評家は批評家で仕組みをつくって育てるような動きがあってもいいと私は感じています。

○事務局（加茂市民文化課長） 最後に、猪熊委員、よろしくお願いします。

○猪熊委員 遅れてすみませんでした。

どなたのというより、皆さんのお話も含めてですが、一番最初はカジタ委員の紙媒体とか受動的メディアの情報数の拡充というところがあります。今回の円卓会議の議題の市民のニーズに応えるわかりやすい文化芸術情報がすごく気になっていました。カジタ委員が書いてくださったように、サイネージの連動であったり、広報さっぽろのリニューアルがあってもいいのかもしれない。それから、皆さんがおっしゃっていた大通情報ステーションは、こんなに言われて大丈夫かと思ったのですが、今から変えることができるのではないかと素直に思いました。

サイネージの連動に関しては、可能なのかどうかわかりませんが、地下鉄、市電、バスなど公共交通機関を中心とした市民であれば動くための道具として使うものに常についていると思うので、その路線図に関連するようなギャラリーや美術館の情報があると自然と目に入ってくると思うので、いいのかなと思いました。

広報さっぽろについては、いつのリニューアルから変わっているかわからないですけれども、今の状態でいいのかもしれないし、どれくらいよりよく伝えるものになるかも正直わからないのですが、何かアクションをしてみる可能性を感じるなと思いました。

三つ目の大通情報ステーションですが、私は、ここにコンシェルジュがいてほしいと思います。正直に言います、期待値がないので、素通りで使ったことは全くないのです。あそこにいらっしゃる方たちを、情報をたくさん仕入れているだろうな、この人はたくさん演劇を見ているのだろうなという雰囲気の方にすれば、こんな音楽が聞きたいけれども、コンサートがありますかとレコード屋さんに行くような感覚で情報を取りに行くことをし

てみたいな、そんな場所が札幌にあったらいいなと素直に思いました。

先ほど小野寺委員がおっしゃっていたように、多言語化は、私も姉妹都市の駐在員の方はいいのではないかと思ったのですが、別件でお会いしたときにすごく忙しいという話は聞いています。ただ、彼らのミッションの一つとして、札幌市の文化情報を海外に出していくところがありますし、日本、北海道、札幌の芸術とはどんなものなのか、ちゃんと発信してもらおうということを文化部から伝えていただくこともすごく重要ななと思います。

ようこそ札幌では、海外の方がひそかにブログを書いているのですが、そこには、こんな美術館に行ったよみたいなこと母国語とプラス日本語で掲載しているので、基本は姉妹都市の方だと思います。ですから、そういうところがフックになって、今後、姉妹都市の人たちに札幌に興味を持ってもらうことがもっとあっていいのかなと感じました。

アートセンターもそうですが、私が今すごく必要なのはエデュケーターという美術や芸術や演劇を伝える人がすごく重要だと思います。教育係と言うのでしょうか、ちゃんとかみ砕いて、子どもにも大人にも同等に伝えられるような人の教育というか、それを知る場所をアートセンターに求めているところが個人的にあるので、学生時代にアートマネジメントなどを学んだ人たちが仕事を得て、広く市民の人たちに伝えられる感じになっていくのが、わかりやすい文化芸術情報につながっていくのかなと感じておりました。

それから、批評に関しては、アーティスト自身、舞台に出る人たち自身もしていいものだと思いますし、することが見てみたいという欲にかられる部分でもあると思います。表現している人たち自身が発信していくことは、批評だけではなく自分の言葉でちゃんと伝えることを受け手としては求めているところかと思います。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

最後になりますと、他の委員の方々とかぶってくると思いますが、いろいろなご意見をいただきまして、ありがとうございました。

それでは、幾つかこちらからもお伺いしたいと思いますが、猪熊委員のご意見に、札幌市としてどのメディアを育てていきたいかを確立させるというものがあったと思います。それから、角田委員も、いろいろな媒体のお話をしていただいたと思います。デジタルデバイスではないですが、情報格差といいますか、パソコン、スマホを見られる人、見られない人などさまざまで、どこにターゲットを定めて、どこを重点化するつもりかといったご指摘もいただいたりします。片や、いろいろな方がいるという現実の中、どういうふうにしていくといいなとイメージされているのか、参考までにお伺いできればありがたいと思っています。

我々に突きつけられた課題を、逆に返しているところはあるのですけれども、何かイメージがありますか。

○猪熊委員 イメージですが、一番わかりやすいところで同世代ということがあると思います。

○事務局（加茂市民文化課長） いろいろな市民がいるという前提のもとに、どういうふ

うに展開していったらいいと思いますか。

○猪熊委員 難しいですね。ちょっと時間をもらっていいですか。

○事務局（加茂市民文化課長） 要は、そういうことだと思っただけです。これは、常に我々に突きつけられるのです。やはり、紙媒体からSNSまでとなると相当広いです。ですから、我々もこれは非常に悩みどころで、行政は、どちらかというと世の中の流れよりもやや遅めです。よくないところではありますが、テレビ、ラジオは定番ですが、ツイッターなどが当たり前になったときに、やっとそこに乗っていくことが多いです。

我々も非常に難儀しておりまして、回答が難しいものの一つです。ただ、我々もいろいろな媒体を使っていこうという意識はあるので、これからやっていく必要があると思いました。

○カジタ委員 紙媒体は、いっぱい刷ろうとするとお金がかかるのです。ですから、僕の感覚で言うと、紙媒体は入り口で、タイトルと本当にちょっとしたことが書いてあるようなものに徹底してもらえれば載せる情報が増えたりすると思います。

インターネットを使うものに関しては、情報量はたくさん載せられるので、数よりも深さみたいなものを重点的にするとか、紙と電子媒体は違うので、それぞれの特性をもって当たればいいかなと思います。かかる経費を考えると、実際に全てを網羅してやろうというのは無理です。紙媒体で情報ステーションに載っているイベントを載せるとお金が幾らかかるのだという話になってしまっただけで続かないと思います。それであれば、限られた枚数でどういう載せ方がいいのかということ突き詰めていくといいかなという気がします。

○事務局（加茂市民文化課長） さまざまなご意見をいただきありがとうございます。

一旦この辺りで区切らせていただきたいと思います。

それでは、5分ほど休憩をとらせていただきまして、後半の議題に入らせていただきたいと思います。

[休 憩]

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、会議を再開いたしたいと思います。

続きまして、本日の二つ目の議題に移りたいと思います。

この会議の最後の議題になります。

札幌市の文化行政全般についてご意見がありましたらということで、ペーパーの一番最後に記載していただいたのですが、文章だけでは伝わりにくいところがあると思いますので、記載内容の趣旨についてご発言をお願いしたいと思います。

それでは、猪熊委員からお願いします。

○猪熊委員 これは、生意気なことしか書いていなくて大変恐縮ですが、文化行政のゴールというのは非常に難しく、先ほど森嶋委員がおっしゃっていたように、文化芸術を見ている人がどれくらい増えているのか、それから、有名な人が出ることがゴールなのか、

一致団結して札幌はこんなところを目指しているのだということであれば、こっちに動いてみようと、これを変えてみようとというふうに市民レベルではなると思ったので、目標があるのであれば、ぜひとも共有したいなという自分の気持ちも含めて書いてみました。

二つ目は、若年層へのアプローチを学校教育の中でもう少し幅を広げて展開してみようというふうに書いてみました。美術館やK i t a r aでは、ファーストコンサートとか「ハロー！ミュージアム」という取り組みがされていて、平日はボランティアが小学生を誘導しているのを見ている中で、すごくいい取り組みだと思うのです。ただ、自転車の乗り方もそうですが、子どものころに教育されて大人になって逆走しているということがあるので、小学生だけではなく、社会人になって会社が文化芸術を見るような福利厚生があったら素敵だなと思ったので、継続していったら面白いかなと思いました。

小学校教諭とともに文化行政を考える勉強会は見てみたいと思いました。それは、何をゴールとしているのかということとつながるのですが、それを先生とも共有しながら、ここの写生会をしてみましようとか、「ハロー！ミュージアム」はこういう立ち位置ですよということを理解しながら教育現場でちゃんと仕切っているということも重要かと思いました。

それから、教育にかかわる大人と書きましたが、これはアートセンターがそういう場になると思うのですが、親子でアートセンターに来て、子どもたちが美術を見る、大人も一緒に見る、何かつくるときに一緒に参加するとか勉強する場が増えていったらいいなと思います。

三つ目は、北海道、札幌だけのメディアだけではなくというところで、前回の会議でも気になっていたのですが、札幌だけでおさまるのではなくて、文化芸術と言うのであれば、日本や世界とどうつながっていくのかをもうちょっと戦略的にやっていってもいいのではないかということです。

最後は、私が答えられなかったターゲットについてですが、やりながら見つけていくのだろうと感じたところです。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

1番目の文化行政のゴールですが、以前もあるところで、あなたは、文化についてどう考えているのかと尋ねられたことがあります。ものすごく抽象的な聞かれ方ですが、そうしたときには、文化の定義、文化行政とは何だという根本のところの議論になってきます。文化というのは、人が生活すれば生まれてくるものであり、衣食住も文化ですという趣旨の回答をしました。

では、文化行政を行う文化局が衣食住を取り上げているかといったら、やっていません。結局、我々文化行政とは何をやるセクションなのかということに行きつくのです。ですから、この文化行政のゴールをどう定めるかと聞かれたときに、まず、文化行政は何をやる行政なのかということと共有しないと、我々が回答してもぴんとこないのではないかという気がします。

これは大事なところだと思いますが、猪熊委員、文化行政にどんなイメージを持たれていますか。

○猪熊委員 私は、どちらかというと教育というところにつながっていくので、大人に対してもそうですが、まずは子どもに対して文化をどう育ていけるか、どう発想したり、このまちで生活するきっかけをどうつくれるかということだと感じていました。

○事務局（加茂市民文化課長） もともと文化行政は、教育委員会が所管していました。今も生涯学習という社会教育の形でも行っていますが、その中に文化が包含されていました。戦後、行政が文化行政として何をやったかということ、文化財の保護です。税金を使うので、ある程度国民が納得する分野ですね。文化行政とは、文化財保護と文化施設の整備が中心でした。そうした分野は比較的裾野が広く、文化財を守ることにについて、多くの方は反対しませんし、文化施設を整備すればアーティストも出演でき、見る側も参加できます。ということで、文化行政の基本は、文化財保護と文化施設整備だったのです。

ですから、猪熊委員がイメージしている文化行政のゴール、こんな感じなのだろうなと思っていることと、行政側が文化行政のゴールは何かと聞かれたときの相違はとても大きいと思います。それぐらい「文化」の意味合いは広いということに尽きるのだと思います。

○猪熊委員 今の話はすごくありがたくて、私自身、その根本の部分を余りわかっていなかったのも事実です。今話を聞いて、文化財の保護というのは、今、文化をつくっている生の人間が過去になったときに、アーカイブしておかなければいけないということにつながってくると思ったのです。ですから、決してずれている話ではなくて、今、文化財の保護をどういうふうに解釈していくかということがすごく重要だと感じました。

○事務局（加茂市民文化課長） 猪熊委員は、文化行政を進めることによって人々の気持ちはどう変わっていくのか、教育によってどう心が豊かになっていくのかという部分をイメージされていると思います。

行政というのは、何かをつくるのか、何かを整備するとそこで終わってしまいがちです。それを使って皆様にどういうふうにしてほしいというところは、我々に足りていない部分だと思います。猪熊委員の話を聞きまして、行政は、それをやった後、どうしていきたいのか、どういうふうになって欲しいのかということを考えて施設をつくる、そういうことを意識しなければならないと思いました。

次に、小野寺委員、よろしくをお願いします。

○小野寺委員 私の書いたものは、先ほども言いましたけれども、モニター、サポーターということで、コンシェルジュも人ですし、具体的に人を育てたり、集めたり、考えたりということをやっていたらいいと思いました。

この原稿を書いていたことを思い出したのですが、個人的にあれっと思ったことは、今年度のメンバーでの会合は2回ということで、すごく少ないと思いました。これをモニターということでやったら、もっといろいろな意見を聞けたのに思いますし、私はもっと深く接点を持ったり勉強できるのかなと思って応募しましたので、このメンバーが2回だけ

で解散ではなくて、せっかく2度の会議で話し合っているのだから、同窓会のようなものがあればいいなと思います。

そして、過去の資料を見せていただきまして、先にこういうことにかかわった諸先輩たちと、正式なものではなくて、簡単な同窓会の橋渡しをしていただきたいと思います。今は個人情報の時代なので、過去の委員の名前は載っているのですが、どこのどなたかわかりませんが、その人たちともある意味同志だと思いますので、その人たちの中からモニター、サポーターが5年後、10年後に何となく形ができ上がっていくということがあればいいなと思います。

私は、今日で皆さんとお会いできないのだと思ったら、モニターでもよかったなという気がします。逆に、市の方にどうして2回なのかということをお聞きしたかったのです。たくさん開きたいとは思っていませんが、2回というのだったら3回くらいで、皆さんが何か感じたことや考えたことを最後の3回目で発表するようにしてはどうか、なぜ2回なのかという疑問を持っていました。皆さんを困らせるつもりではないので、2回になった簡単な経緯をお知らせいただければ、それで十分です。

そして、私以外の皆さんの専門家的なすばらしいご経験と知識を、ちょっとした市の食堂や喫茶店のようなイメージでお話ができれば、私の人生においてもすごく役に立つなと思いました。

それが、私がここに書いたイメージの一つです。

もう一つあるのです。ここに「市民による企画、立案、実施。プロのアドバイスはあってもよい」とありますが、イメージしたのは、私の勤務する学校は岩見沢にもあるので、もう15年くらい、非常勤で週に1回、岩見沢に行っています。まなみーるという市民会館がありまして、私は生活学が専攻ですから、学生を見学に連れていきました。そのときに、その事務局にいろいろと聞きました。そうしたら、逆に、看護学科の学生がうちのボランティアに来ることができますかと聞かれました。要するに、私につながりを求められたのです。

話がまた飛びますが、私の教え子は実際にボランティアをしていないのですが、私の岩見沢の友人の娘さんは、演劇が大好きで、ボランティアでこことかかかっています。しかも、偶然、人形の作家の方と私の知り合いが友人関係で、その人形作家の方は、世界中を回っていて忙しいけれども、今度、岩見沢で講座を開くことになったという話を聞きました。そういうすばらしい方が岩見沢の講座で地元の人に教えるなんていいなと思いました。札幌市は広過ぎるので難しいかもしれませんが、岩見沢のことをヒントに札幌なりのことを私がイメージしたモニター、サポーターの中で話し合っ、具体的にやっていけたらおもしろいなと思いました。

私の教え子は、看護学科で、国家試験があるから、卒業後に岩見沢の病院に就職したときにはできるかもしれないという発言もあったものですから、それをこの場で述べさせていただきます。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） まず、ご質問をいただきました、なぜ3回ではないのかということ。あと1回あれば小野寺委員もご満足いただけたのではないかと思います。

たしか前回の会議でも申し上げましたが、これまでは2カ年にわたって8回ぐらやってきたのです。長期間の拘束ということもありますし、3期にわたって同じ形でやってきたので、形を変えまして、テーマは設定しますが、テーマ以外のこともたくさんお出しただいて、我々もそこから学んでいこうということで、それならば2回くらいかなと考えて、こうした形にしました。

この形は、試行錯誤で、今回はチャレンジして形を変えてみました。来年度は、私としては、もっと多くの人数を集めてワークショップのようにやってみても面白いかなと思っていました。今は構想段階ですが、さまざまな形態をとりながら、皆様の文化行政、文化芸術に関するご意見を伺っていかれたらと思っております。

また、今、雪まつりをやっていますが、去年は人形オペラを、雪像をバックにやりました。去年、教育文化会館でもご公演をいただきましたけれども、こんな方がいるよという情報をいただきながら、北海道出身の方は地元でやりたいという熱い思いを持っていらっしゃる方が多いので、我々もできるだけ市民の皆様と一つでも多くのものをつくっていただけたらと思っています。

続きまして、カジタ委員、よろしく申し上げます。

○カジタ委員 書いてあることはすごく端的で、各イベントの担当部署ごとの連携がどれくらいとれているのかというそのままです。札幌にはいろいろとあります。札幌国際芸術祭、札幌演劇シーズン、PMFもあります。先ほどの話ですと、どこまで文化と言うのかということもありまして、オータムフェストを入れるのかという話になるとまた広くなってしまいますが、行事的にやっているイベントは国際短編映画祭もそうですね。ただ、外側にいると、固まりとして見えてこないのです。札幌市はいろいろやっているのだな、文化イベントをやっているのだな、おもしろそうという印象を外にどれだけ与えられているのか、そこをうまくまとめるのは広報が担う分野で、そこは一個一個、話を聞いて色分けしながら並べることが重要だったり、連携をとってお互いにうまくPRしていく必要があるのではないかと思います。余り連携がとれている印象がないので、その辺はどうなっているのだろうかという質問でした。

○事務局（加茂市民文化課長） 我々も、連携という言葉が聞かれると、連携していきまうと言いますが、難しい言葉です。我々もよく使うのですが、具体的にどんなことをすると連携がとれていると見えるのか、アドバイスがあれば教えていただきたいと思います。

○カジタ委員 以前、飛行機に乗ったときに、冊子を見ましたら、札幌でこんなイベントをやっていますよというのが幾つか並んでいたのです。それだけでも、いつの時期に行っても札幌はイベントをやっているのかと思ったのです。ただ、そういうものを市民や外に対してどれくらい出しているのか。さっき森嶋委員が持ってきたチラシではないですけれ

ども、札幌市がやっている大きなものでもいいから、年間通してこんなにやっているよというものを紙媒体などで出すと違うなと思います。

あとは、もっと具体的に言えば、折り込みもそうかもしれません。それも、個別でばらばらにやっている印象があります。ジャズとPMFは同じ音楽のジャンルですが、PMFは好きな人のためだけにやられているという印象もありまして、一緒に何かをやったりしてもいいと思うのです。内部にいたことがある者としては、それも面倒くさいなと思うのですが、情報をちゃんと吸い上げて、まとまった形できちんと広報することができるかどうかなのかなと思います。

○事務局（加茂市民文化課長） もしかしたら、市民に向けてそういう見せ方をしていないのかもしれないね。意外と、例えば首都圏向けに冊子をつくるときには、春夏秋冬の札幌の景色を見せながらイベントという形でパンフレットをつくってお配りすることはあるのです。もしかしたら、札幌市民にはパッケージした見せ方をしていないというご指摘かと思います。それは、広報部局と相談します。

○吉田委員 去年のサッポロ・シティジャズのパンフレットの中で、PMFのページは1ページです。しかも、それは芸術の森のイメージみたいなものがあるだけでした。例えば、なぜそこに主な日時が載っていないのか。確かに、市民だったらすぐどこかに取りに行けますね。でも、観光客が見て、今日、PMFでこんなことをやっているのだと思える程度のものではないので、1ページもあれば載せられると思うのですが、そんなものも全然載っていません。これをもって連携していると言えるのかと思います。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

イベントの担当部署の連携ですね。パッケージ化して見せるのは、どこか俯瞰して見ることができる部局でやらなければいけないと思います。

先ほどおっしゃったように、雪まつりは観光のセクションがやっています。考え方によっては、雪像は芸術作品ですから文化部であってもおかしくないですけども、観光のセクションです。国際短編映画祭は経済局がやっています。PMFやシティジャズ、国際芸術祭は文化部がやっています。こういう構図になっています。

正直に申しますと、全て文化に包含されます。人がやることは全て文化なので。その中で色を見きわめて、それぞれの所管部局がやっているというのが現実です。見せ方というのは、お互いに意識しながら、先ほど吉田委員からもありましたけれども、せっかく広告を載せるならもう少し工夫してくださいということは、我々も常々意識してやっていかなければならないと思っております。

続きまして、川上委員、よろしくをお願いします。

○川上委員 書いたものとしては、アートセンター計画の進行状況について教えてくださいということです。

建物はできるようですが、実際の運営がどのようになっているかということ。指定管理者が決まったようなことが書かれていましたが、それだけではわかりません。指定管

理者の選定に際しては、K i t a r aでの実績が評価されて、札幌市芸術文化財団がやるのはいいと思います。ただ、今日の前半の1時間でもたびたび出てきたように、アートセンターというのは箱ではないので、そこをどういうふうに動かしていくか、私としてはすごく気になっています。まさに顔というか、芸術監督がいて、それをちゃんと選んでくれるのがいいなと私は個人的に思っているのですが、そういうところに関して、どういう運用をしていくのか、教えていただけたところがあるといいなと思って書きました。

○事務局（加茂市民文化課長）そこについては、今お話があったように、劇場とアートセンターは札幌市芸術文化財団というK i t a r aや教育文化会館、芸術の森を運営している財団が指定管理者となり、この4月から指定管理業務が始まります。その前段で、札幌市がこの施設をつくるに当たって、どんな施設にするかということも決まっているわけです。

また、どんな事業をやっていくかということも、ある程度はイメージしながら施設計画をつくってはおりますが、まだ詳細までしっかりとは決まっておられません。アートセンターにおける人材育成とか普及啓発といっても、これはとても大きな枠組みの話でしかありません。もう少し具体的に、どのようなことに取り組んでいくのかということをお知りになりたいのだと思います。そのあたりは、もう少ししたら皆様にお知らせしていけるような段階になると思います。

芸術監督もまだ決まっておられません。設置するかどうかも含めて検討しているところです。

○川上委員 様式に記載してあるのはそれだけですが、円卓会議に選ばれているのだと周りに話をしたときに、結局のところ、札幌に足りないのは教育ではなかろうかという話に行き着きました。美大がない、美大をつくって欲しいという話をしてくれたいと周囲から言われました。美大ではなくても専門教育を持てる場所をつくること、それから、初等教育、中等教育の中でももっと触れ合う機会をたくさん持てる工夫をしていかないと人材は育たないということになると思います。最たるところは大学だと思っておりますが、今も岩見沢の話がたくさん出てきたのですが、それは札幌市ではありません。ですから、札幌市にそういうところがないとだめだと思うのです。そういうことができるような努力をしていただきたいということを書いてきてほしいと言われましたので、申し上げました。

○事務局（加茂市民文化課長）札幌市には、札幌市立大学がありまして、もともとは高等専門学校で、美大ではなくデザインと看護の学部を持っています。

また、教育ですが、おっしゃったように、我々は、大学もさることながら、小学校の段階、もしかしたら幼稚園の段階かもしれませんが、その段階でいかに文化芸術に触れていただくかということが、その後を決めていくのだろうと考えています。札幌市では、全小学校6年生にミュージカルを見ていただき、K i t a r aでクラシックを聞いていただきます。そして、全小学校5年生は、芸術の森や彫刻美術館に行って美術作品に触れてもらうということをやっている、他都市にはなかなかない事業だというふうに思っています。ただ、それだけではまだ足りないとも思っています、子ども向けの取り組みを増やして

いかなければならないということで、先週お配りした計画書に、子ども向け事業を重点施策として記載し、取り組んでいこうと思っております。非常に大事だと思っております。

○カジタ委員 これは、また聞きですけれども、ある演劇の代表で、もう50歳近い方なのですが、小学校の学芸会が演劇を遠ざけてしまうという話をしていました。学芸会でいい体験ができないから演劇に対してマイナスの印象を持ち、そのまま育ってしまうからよくないということをいつも言うのです。鑑賞授業もそうですけれども、ワークショップ授業に近い形で、今はダンスもあると思いますが、専門家が行って楽しめるような授業もあったりするといいかたと個人的には思いました。

○事務局（加茂市民文化課長） 我々も、出張して行う事業は必要だと思っております。先ほど言いましたように、ミュージカルを見てもらおう、クラシックを聞いていただく、芸術の森に行ってもらおう、これは比較的全学年というか、全市レベルでできるのです。小学校は200校、中学校は100校あるという状況の中で、実は、出向いて行くおとどけアートという事業もあって、芸術家の方に各学校に行ってもらい、そこで長期にわたって取り組みをしてもらって、何か作品をつくるといった事業をやるのですけれども、年に4、5校が限界です。

それを草の根的にいろいろな形で増やしていくのが、我々が当面取り組む方向性かなと思っておりますが、費用対効果という面で、なかなか拡大できていないのが現状です。これからも頑張りたいと思います。

続いて、角田委員、お願いします。

○角田委員 白紙で出してしまいましたので、急いで書いてきました。

文化芸術に触れられる機会は、北海道の他の市町村よりも多いと思うのですけれども、いざ、その職業を目指そうと思ったときに、受け皿や指導者、経営、さらに、その過程での職業選択の教育が整っていないと思います。毎年、文化芸術振興助成金を募集していて、場を与えているということは大変すばらしいと思いますが、新人育成という点では、もう少し民間と協力するなどして、本当の意味で北海道で活躍できる芸術家などを増やす施策を考えることが必要ではないかと書きました。

私は、若者支援とか、仕事を通じてのキャリア教育の仕事をしていますので、どうしてもこういう視点になってしまうのです。先ほどもおっしゃられたように、札幌は文化に触れられる機会がとても多いと思うのです。ただ、憧れました、いざその職業につきたいと思ったときに、専門学校や大学などはあるのですが、結局、北海道では生計を立てていけずに上京したり、バイトをしながら頑張っていくということがほとんどなのではないかと思えます。

本人の頑張りが一番ではないかと言われたらそれまでですけれども、せっかくの才能が流出してしまったり、途中で諦めたり、そこそこの活動しかできないということが実際に多いと思います。すごく大がかりなことではあると思うのですけれども、先ほども出ていましたように、プロデュースする方や指導者の確保、道内企業や学校、一般の人たち地場

のアーティストを応援する気持ちを一体となって整えていくことが必要ではないかと思えます。

壮大なテーマだと思えますし、人材流出を防ぐため、札幌で生計を立てる方法や指導者をどうするかということをして盛り込んだのですが、そういうことが必要なのかなと思っております。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

先ほどの繰り返しになりますが、アートの世界でどう活躍していくか、生計を立てているのか、それから、アーティストではないけれども、アートの世界で活躍する人たちの場がこれから求められているというのは我々も認識しております、アートセンターをうまく活用していただければいいなと思っております。

続きまして、森嶋委員、お願いします。

○森嶋委員 皆さんの話を聞いていて、私はポジティブな人間なので、個人的には可能性しか感じていません。やはり、この円卓会議の場はとても素晴らしいものだと思いますし、第1期から第3期まで読ませていただきましたが、とても面白くて、可能性にあふれているなと感じております。雪まつりも、親子連れはいるのでしょうか、昔は市民と遠いイベントかなと思っていました。最近、人形劇をやったり、プロジェクションマッピング、今回は演劇もやるということで、細かく言うとチラシのデザインもかわいくなってきたような印象を受けます。少しずつ札幌市が変わっているなという印象が個人的にはあります。

今、皆さんがおっしゃったことは、アートセンターでほとんどできるのではないかと感じています。あとは、メッセージが足りないのかなと思えます。例えば、PMFの話が出ましたが、私はただのクラシックのコンサートかなと思っていたのですが、世界に3都市だけしかやっていない国際的教育プログラムと知って、そのよさをどれだけの方がご存じなのかと思っております。そういう世界に誇れるコンテンツがあるのであれば、それをみんなで共有すべきだと思います。

美大とか芸術監督というのはすごく難しい問題かと個人的には思っております。先ほども申しましたが、文化行政とは何かと考えたときに、まちのアイデンティティを形成することや幸福度を上げるということにつながると思います。札幌が札幌らしいまちになっていくには、何の芸術監督なのか、美術なのか、ダンスなのか、演劇なのか、それとも、それを全て兼ねるスーパーマンのような方がいらっしゃるのか。

例えば、ダンスであれば、新潟県にノイムズというダンスカンパニーがありまして、これは県が抱えるコンテンポラリーダンスの公務員ダンサーです。それが果たして全ての都道府県に必要なのかということもありますし、今後、アートセンターにオペラやバレエの芸術監督を招くとなったときに、国際的な感覚で見ると、輸出品という部分もあると思うのです。ですから、アフリカに行ったらオペラを見たくなくなるかといったらそうではないし、イタリアへ行ったらオペラを見たくなくなったりワインを飲んだりとかがあります。すごく難しいことを言っていますが、まちのアイデンティティを見失わないことが大切だと思います。

ます。

あとは、実務は市民の方とどんどん連動していけば、結構できるのではないかと考えております。先ほど小野寺委員がおっしゃっていたフリーペーパーも、結局、アートセンターがフリーペーパーなどを企業向けに情報をまとめてリリースしてあげれば良いと思うのです。フリーペーパーの方がどうやってイベント情報を探しているのかわからないのですが、発行者がアートセンターで情報を見て、それをピックアップすることもできますよね。他にも、アーティストの地域派遣や学校派遣もそうだと思いますし、企業やデザイナーなどのアーティストバンクなども、全てアートセンターでできるのではないかと思います。

広報に関しても、例えばアートセンターにチラシを5,000枚なり1万枚を持っていたら、関係各所というか、主なところに配ってくれたらと思います。それは、個人的には有料であってほしいと思います。無料で何でもかんでもできるというのはよくないと思っています。有料で派遣や案内をしてくれるとか、猪熊委員がおっしゃっていた、小学校教員が集まってトークする場もアートセンターでできれば、もう可能性しかないなと思いました。

ありがとうございます。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

いろいろなご意見をいただきました。

冒頭に雪まつりの話がありました。たまたま今、雪まつり期間なので、少しそのお話をさせていただきます。プロジェクションマッピングや劇をやったりということで、地元の方に雪まつりは少し変わってきたのではないかとと言われて、大変うれしく思っています。本州のお祭りは、参加者は地元の人が主体のものが多く、一方で、札幌のお祭りは外から客を呼ぶイベントという色彩が強く、地元民のお祭りになっていないのではないかと。そういうご批判があります。やはり、地元の方にいかに参加してもらうか、来ていただくかが大事だろうということで、プロジェクションマッピングを最初にやったときに、会場があふれてしまったのです。実は、ホテルの宿泊上限と飛行機などの輸送量は決まっていますから、そこを増やさなければ、道外から来る方はこれ以上増える余地は少ないのです。それではなぜあふれたかということ、地元なり近郊の人が来てくれたということの裏返しに他ならないのです。1回目のプロジェクションマッピングは中止になってしまったのですが、2回目はもっと広い会場でやるなど改善を重ねて今に至っています。

先ほど申し上げました人形オペラや、今年は演劇をやったりという形で、ただ雪像を見に来るというのではなくて、そこに芸術性をさらに加えて新たな形で地元の人たちに何度も足を運んでもらう、繰り返し毎年来てもらおうという形をぜひ実現したいなという思いで雪まつりを変えていっている中で、それを感じていただけるというのは、我々としては非常にありがたく思います。引き続き頑張っていきたいと思います。

どうもありがとうございました。

最後に、吉田委員、お願いいたします。

○吉田委員 1ページ全部書きました。

1つ目は、去年の秋のさっぽろアートステージ、2つ目と3つ目は一言で言うと文化芸術ツーリズムについてです。皆さんのような大局的なご意見というよりも、各論みたいなご意見ですが、市民として気づいたことを書きました。

1つ目は、すごく主観的です。アートステージでチ・カ・ホにいろいろなインスタレーションがありました。私は、見ていて、もちろんアートが非常に身近になったということ、その一連の流れの中でやっていることはわかるのですが、レベルがどうかと感ずるものが幾つか見当りました。ああいう場所を使ってやっている観光客もおりますし、そういう方々がこれはどうなのかというふうに思われるような、いわゆるまちのイメージ悪化につながるようなものも感じられたものですから、予算なのか、チェック機能がどうなっているのか、審査がどうなっているのかわかりませんが、少し気をつける仕組みがあってもいいのではないかと思います。

ただ、これは主観的なものですから、皆さんかどう思われたのか、正直わかりません。

2つ目は、先ほど兵庫の例が出ましたが、福岡もとてもよくやっています。今、ちょっと規模が小さくなってしまっているのですが、いわゆるバロックやルネッサンスのクラシックのとてもユニークな音楽祭を、以前、かなりの規模でやっていた、それを聞くために全国から音楽ファンが集まっていました。私の友達も、その期間は必ず福岡に行っていました。

そういうことをやっているアクロス福岡という施設があるのですが、たまたま気づいたのは、私の自宅には音楽で海外のツアーのDMがたくさん届くのですが、その中にちゃんと同梱で福岡のチラシも入っているわけです。目のつけ方がかなりいいなと思ったのです。例えば、そこにK i t a r aのチラシが入っていても構わないわけです。札幌でやっているから札幌市民のためにというよりも、観光で来たらたまたまやっていたもなく、観光で行くからそのときに聞けたらいいな、この時期にやっているのだから聞くのも兼ねて観光をしようかというふうになっても構わないくらいのすばらしいものが札幌にあるわけです。それは意外と地元の方が気づいていないのかもしれない。

東京だったら、すさまじいほど量があります。ただ、正直に申しまして、私も40年近くも向こうにいたからわかるのですが、機会提供という意味ではすばらしいかもしれないけれども、本当に音楽を聞く環境なのかと思います。次から次と使い捨てにみたいになっていると私はすごく感じていたのです。もちろん、そう感じていない都民もいると思います。

札幌のK i t a r aで聞いて、その後、余韻を楽しみながら公園を歩く、地下鉄の入り口が遠くて嫌だと言っている方がたくさんいるのはよくわかっているのですが、あんなに豊かな時間を過ごせるのは、東京では本当にはないです。唯一、緑があるのが上野公園の文化会館ですけれども、あれも目の前に駅があって騒音がすごいわけです。サントリ

ーホールという、すごくイメージがいいかもしれませんが、高速道路が目前にあって、車の騒音が上から降ってくるわけです。そういうことが気になさらない方がいいけれども、気になる方にとっては、これが果たして音楽を聞く環境なのかと言いたくなります。しかし、札幌はそうではないわけです。それは、1回来たらわかるのです。これはヨーロッパよりすごいとなるわけです。

そういうことに気づいてほしいというのが2つ目、3つ目のところ。2つ目は、例えばPMFがあって、そのときにパッケージツアーが組まれるのは可能かもしれないけれども、そうではなくて、年間を通していろいろなものを行っているので、何か仕組みをつくってトータルでディスカウントするようなことができないだろうか、まだ、本当にアイデアレベルですが、札幌がそういうものにイニシアチブをとってやってみてもいいのではないかと思います。東京ではできないでしょうが、札幌だったできるかもしれない。札幌でやったら福岡も真似るかもしれません。それはわかりません。

3番目は、ル・フォル・ジュルネですが、ご存じの方はどれくらいいらっしゃいますか。クラシック音楽の大衆化ということにおいて、これほど役に立った音楽祭は今までなかったのではないかと思います。もともとフランスのナントで始まったのですが、ディレクターの方が有能で、あちこちで始めて、その東京版が始まったのが10年前です。

コンセプトを言いますと、まず、演奏会は、普通2時間ぐらいかかりますが、それが半分の1時間で、1,500円から2,500円ぐらいた安いです。アーティストは海外から来ますから極めてレベルが高いです。それだけではなく、普通だったら興業的に成り立たないようなプログラムをやってくれるのです。クラシックファンもそうですが、クラシックなんかほとんど聞いたことがない、特に現代曲なんか知らないという人間がたまたま安いからちょっと冷やかして聞いてみようかと思っただけで、すごくおもしろいというものがたくさんあるのです。こういう方は、普通のクラシックの演奏会なんてまず行かないのです。高いし、忙しいですから。そうなのですが、この取組は本当に気楽に、会場が有楽町に八つぐらいあって、朝11時ごろから夜11時までだいたい六、七公演ぐらいあるのです。掛け算すると48公演で、それを3日間やるわけです。以前は5日間でした。何で減ったかということ、ここに書いてあるとおり、金沢、琵琶湖、新潟でもやっているからです。要は、うちでもやってくれと手を挙げたのです。この期間はアーティストを派遣して、それぞれ2日間ぐらいたっています。

これが始まって5年ぐらいたったころにどこか手を挙げませんかとかわざわざル・フォル・ジュルネの事務局が言ったわけです。そこで手を挙げたところで成立しているわけです。私は、なぜ札幌市が手を挙げないのかなと思ったのです。確かに、新幹線ではなくて飛行機代がかかるのもあるかもしれないけれども、札幌だったら受け入れ態勢が完璧に整っているわけです。ちょっと寒い時期かもしれないけれども、クラシックの大衆化という意味でものすごく役に立ちますし、無料の公演もたくさんありますので、家族がそういうところにピクニック気分に来るのです。そこに屋台が出ていて、たまたま有料の公演も一つづ

らい聞こうかな、あとは雰囲気を楽しんで家族で帰るかというイベントをやっているのです。

この説明だけでは本当に舌足らずでおわかりいただけないでしょうけれども、とにかくここに書いてあるとおり、この3日間でチケットが15万枚売れるというとんでもない音楽祭です。さっきもソムリエという言葉がちらっと出ましたが、これがきっかけでクラシックソムリエというシステムができていて、クラシック音楽に詳しい人をたくさん育てようという、つまりコンシェルジュみたいなもので、その検定試験までであるわけです。こういう方がどんどん出てきていまして、今、そういうふうに広がってきています。

市がどういう形で動くかもあるのですけれども、ル・フォル・ジュルネの事務局に問い合わせ、そういう可能性を検討してみるのはかなり有望ではないかとクラシックファンとして見ています。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

アートステージにつきましては、美術作品は人によって見え方や感じ方がさまざま、なかなか難しい面もあります。ただ、そういうご意見があったことは我々から実行委員会に伝えまして、よりよいものにしていきたいと思っております。

また、ツーリズムとル・フォル・ジュルネのお話は勉強させていただきます。

それでは、時間を超過してしまいましたけれども、2回にわたり皆様からさまざまなご意見をいただきました。本当にありがとうございました。

今回で終了ということで、先ほどの小野寺委員の話ではありませんが、ようやく少し打ち解けてきたところで終了ということで、大変申しわけなく思っております。大変名残惜しいところもありますが、今回の会議でいただきましたご意見につきましては、我々の方でしっかりと整理させていただきます、今後の札幌市の文化行政推進の参考にさせていただきますと思います。

3. 閉 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、以上をもちまして、第4期札幌文化芸術円卓会議を終了したいと思います。

まことにありがとうございました。

以 上